

識別番号 K 1
研究課題 儒教文化圏でのキリスト教受容
研究代表者 佐久間勤（キリスト教文化研究所・神学科）
共同研究者 大橋容一郎（哲学科）、片山はるひ（神学科）、具正謨（神学科）、高山貞美（神学科）、竹内修一（神学科）、田中裕（哲学科）、増田祐志（神学科）、光延一郎（神学科）、
Summary Aim of the research project is: to investigate the cultural characteristics which emerges from the encounter between Christianity on one hand, and the East Asian culture whose common basis of thought is Confucianism, on the other hand.

1. 本研究の目的および背景

東アジア、極東アジアでのキリスト教の受容や反発などを、神学、キリスト教文学、社会学、漢文学、東洋史など様々な専門の立場から多角的にとりあげて、儒教あるいは漢字文化圏特有のキリスト教のあり方を探る。

アジア諸文化とキリスト教文化との出会いは地域的特性により多様な形態をとるが、東アジア文化圏に関しては仏教との関係に主眼が置かれ、この地域の文化の根底に流れる儒教的思想との出会いはキリスト教受容の観点からは十分に考察されてきたとはいえない。中国、韓国（朝鮮）、台湾、日本の文化的共通基盤として儒教を捉え、キリスト教理解あるいはキリスト教との対決に見られる特徴を研究する。

2. 研究の方法・内容と共同研究員の役割分担

以上の共通目的のもとに、各研究員がそれぞれの専門分野の方法論に基づいて研究し、①儒教思想とキリスト教思想の比較研究、②儒教思想のキリスト教受容への影響、③儒教文化圏におけるインカルチュレーションと宗教間対話の可能性という三つの問題意識のもとに、総合的観点の構築を追及する。

《儒教思想とキリスト教思想の比較研究》

● 具は、韓国のキリスト教布教の背景となった朝鮮後期の儒教思想である朱子学を研究し、儒教的な天観と人間観がどのようにキリスト教的に変容したのかを紹介する。具体的には、18世紀後半に書かれたキリスト教の教理書や信心書である『主教要旨』、『上宰相書』、『天主歌辞』などを研究することによって、キリスト教の受肉における朝鮮儒教の思想を明らかにする。

● 竹内は、「徳概念を鍵とする儒教とキリスト教の比較」を研究テーマとする。儒教は基本的に徳倫理である。徳は善との関係において考察される。換言すれば、徳とは、それによって人間がより善い人間へと自らを涵養していくものである。儒教における徳の特徴として、次の二点を指摘できる。一つは、徳の涵養は単なる個人の営みではなく、共同体を通して行われるということ。もう一つは、この徳の養成は、決して抽象的概念の理解や体系的知識の把握のようなものではなく、身心が一つとなった人間の具体的経験を通してなされるということである。一方キリスト教においても、徳は重要な位置を占める。キリスト者にとっての真の幸福は神との一致にあり、あ

らゆる倫理的行為はそれを目指している。その際具体的な規範となるのは、イエス・キリストに他ならない。このイエスの福音の要請は、彼が私たちが愛されたように、私たちが互いに愛し合うこと、これである（ヨハネ 13:34 参照）。このように「徳」を一つの鍵概念とすることによって、共通の土壌に立って、儒教とキリスト教との関係を再考することができる。それによってまた、インカルチュレーション（日本文化への福音の受肉・体現）の新たな可能性が見えてくると期待される。具体的には人間の性を「善」と捉えた孟子（前 372～289 年）、および心を正すことを目指しその「実践」を説いた王陽明（1472～1529 年）の思想を、キリスト教思想と比較し、考察の手がかりとする。

《儒教思想のキリスト教受容への影響》

- 片山は、「日本文学におけるキリスト教の受容」を研究テーマとする。明治後期から昭和にかけての日本文学において、主として、太宰治、八木重吉、遠藤周作、三浦綾子などの作家・詩人におけるキリスト教受容の在り方、変遷を研究する。
- 大橋は、「明治・大正期における日本へのドイツ哲学の移入と、それに基づく日本の哲学思想、とりわけ認識論および倫理学の変遷」を研究分野とする。この分野は、儒教文化圏の下で成立した日本の国民道徳・国体思想とキリスト教的西洋哲学との関連を主たる内容とするものであり、本共同研究には不可欠のものと考えられる。具体的には、①明治期の国民道徳成立期、②大正期新カント主義の影響下における日本哲学、③第二次大戦直後の日本思想、をいずれもキリスト教との関係において見直すことが主たる役割分担となる。
- 佐久間は、「キリシタン時代の聖書受容」を研究テーマとして、キリスト教の立場から日本文化への聖書の適応がどのように行われたかを研究する。具体的にはペドロ・ゴメスの『神学綱要』の邦語への抄訳版をもとに、当時の聖書学が日本の文化的土壌に移植される際に見出される特徴を探求する。

《儒教文化圏におけるインカルチュレーションと宗教間対話の可能性》

- 増田は、「キリスト教側からの諸宗教受容と対話の可能性」を研究テーマとする。キリスト教と諸宗教の歴史について。カトリック教会公文書や回勅、現代カトリック神学者の考え。とくに、東アジア（韓国・台湾）の神学者の考えについて交流を含めて探る。
- 光延は、「東アジアにおける歴史認識と和解の問題——東アジアの平和にとってのキリスト教」を研究テーマとする。東アジア各国間には、侵略をめぐる不幸な歴史があり、これを度外視してこの地域の現在と将来について語ることはできない。しかしながら、近年、政治状況の変化に伴ない、過去についての歴史認識が歪められたり、学校での和解に向けた教育が十分になされえない状況が醸成されつつあることが危惧される。こうした中で、東アジアの平和のための共通の思想的基盤について調査し、和解と平和についてキリスト教がいかなる役割と課題をもっているのかを探求する。
- 高山は、「親鸞の教えと宗教間対話」を研究テーマとする。親鸞（1173～1262 年）は、儒学や歌道で朝廷に仕えた日野家出身であるが、仏門に入り、遂には専修念仏の教えに帰依した人物である。キリスト教と浄土真宗との信仰観の類似・相違については、多くの研究者が興味を示すところだが、本研究活動の中で儒教・仏教・キリスト教の宗教間対話を視野に入れて親鸞研究を行う。
- 田中は、「日本ハンセン病文学者への影響」を研究テーマとする。新渡戸稲造、内村鑑三など

日本思想家におけるキリスト教受容の探求を基調に、詩人東條耿一の作品理解をとおして日本文学への影響を発掘する。

3. 研究の成果

2009年度から研究発表を開始し、今年度以降も継続中であり、本報告は中間発表である。発表された成果は以下の三点である。

①片山はるひ所員による「遠藤周作の文学におけるキリスト教の『東』と『西』—『深い河』の女神チャームンダーと聖母マリアの比較を通して」。

本研究において、「遠藤文学に描かれてきた『東』と『西』の差違」をその背景となるカトリックの普遍性の世界から逆照射して捉え直し、「その表層の裏に隠された重層性、すなわち差違の根底にある普遍性」を『深い河』を題材として掘り下げる。遠藤は「西」のカトリシズムがブルジョワの信仰の「虚像」から脱皮させる苦闘への答えとして、遠藤は「東」の女神チャームンダーを「キリスト者の『実像』をあらわす象徴的存在」として提示した。これにより「日本人の心にあうキリスト教を生涯追い求めてきた作家が、意識的にせよ、無意識的にせよ、たどりついた所は、『東』という象徴を借りた、福音的世界への原点回帰であり、そこにカトリック〈普遍性〉を見出していった」と結論される。

②高山貞美所員による「日本人のスピリチュアリティとキリスト教」。

本研究において、「なぜ日本にキリスト教は広まらないのか」という問題意識から出発し、(1)日本の基層文化としての「神道」、(2)中世日本の「清貧」思想、(3)近世日本の「誠」を手がかりとして日本的スピリチュアリティを日常に於ける神と人の交わりと、それへの道である清貧と誠に基づく生活様式に見る。しかしこの伝統的スピリチュアリティは日本の近代化と共に失われる危機に瀕している。この現状に対し、キリスト教の「小さい人々への奉仕」と「殉教」という、自我をも越える献身のスピリチュアリティによって現代日本のスピリチュアリティの空白を満たすことができる。そのためにキリスト教は、日本の伝統と宗教に対し謙遜にかつ忍耐をもって対話を求めるという態度を持つべきであるが、まさにそれこそ第2バチカン公会議が「諸宗教対話」に関して確認した根本方針に従うことである、と結論される。

③田中裕所員による「復生の文学—詩人東條耿一とキリスト教」。

本研究は、「戦前のハンセン病療養所、多摩全生園の文芸誌『山桜』に数々の優れた詩を発表していた詩人東條耿一」の生と信仰の関わりをテーマとする。本研究員自身、本邦最初の東條の作品集「いのちの歌」出版をおこない、その作品を療養所文学ないしはハンセン病文学としてではなく、「すべての人に通じる『いのち』の根底にある苦しみ、死に至る病の苦しみの現実を、文藝の創作活動とキリスト教信仰によって乗り越え、闇の中に光明を、絶望の中に希望を見出した一人の詩人の魂の記録として」理解する。東條の作品に反映される聖書の言葉、とくにヨブ記との呼応から、「東條耿一は、『癩者』という差別と偏見に充ちた言葉を忌避せずに、それを全面的に引き受けた上で、その世間的な意味を宗教的に転換して、神の賛美と感謝の祈りとしている。これ以上の回心があるだろうか。『癩者の改心』は、時代を超えて読者に宛てられた、東條耿一の内面を吐露した書簡なのである」と結論される。